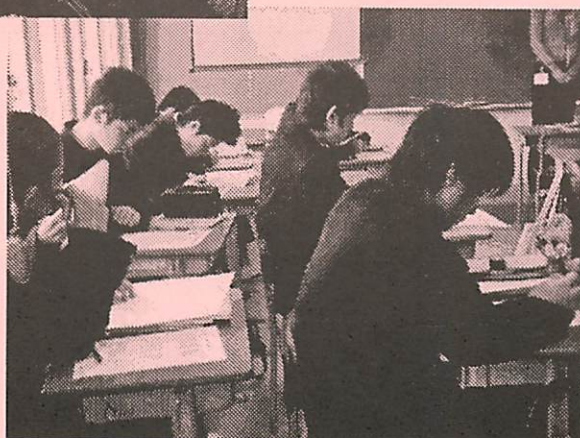
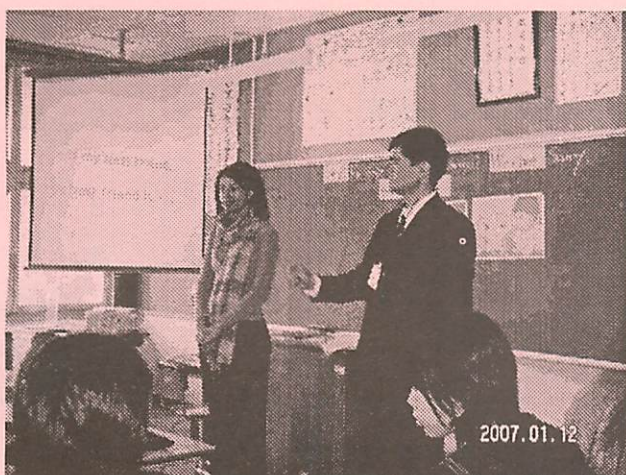


〈 中学校英語科 〉

「テスト」を活用して基礎学力を付ける英語指導の工夫
～テストのメリットを生かして～



浦添市立仲西中学校 上 間 幹 夫



目次

I	テーマ設定の理由	1
II	目指す生徒像	2
III	研究の目標	2
IV	研究の仮説	2
	1 基本仮説	2
	2 作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
	1 テストについての理論研究	3
	2 基礎学力を身に付けさせる出題方法の工夫・改善	5
	3 基礎学力が身に付くような授業の展開や活動の工夫・改善	6
	4 授業以外で英語を使わせる工夫	7
VII	授業実践	8
	1 実践の記録	8
	(1) 単元名	8
	(2) 単元の目標	8
	(3) 単元について	8
	(4) 評価の観点	9
	(5) 指導計画	10
	(6) 本時の展開	10
	2 OBStest の出題方法について	13
VIII	研究の考察	14
	1 作業仮説1の検証	14
	2 作業仮説2の検証	14
	3 作業仮説3の検証	16
IX	研究の成果と課題	19
	1 成果	19
	2 課題	19
	【おわりに】	20
	【主な参考・引用文献】	21



「テスト」を活用して基礎学力を付ける英語指導の工夫

～テストのメリットを生かして～

浦添市立仲西中学校 上間幹夫

【要約】

生徒はテストの存在を意識しながら学習する。本研究は、その目的意識をうまく利用し、「テスト」を計画的に継続的に活用することにより意欲を持たせ、基礎学力を付けようと試みる。しかし、テストで良い点を取るだけを意識した指導をするのではなく、あくまで「テストは手段であって目的ではない」ということを念頭に置いて研究を進める。「テスト」活用に結びつけて、家庭学習等の授業以外での学習支援や生徒を参加させる授業の工夫等を通して生徒の変容を確認する。授業実践を通し、生徒の英語に対する意識の変容が見られ、小テスト8割に達した生徒は英語の基礎学力が付いたと判断して良いと考える。

キーワード

□テスト □家庭学習支援 □授業展開 □ポイントカード □自己評価 □Classroom English

I テーマ設定の理由

「国際社会の中で信頼され、活躍しうる国際性豊かな人材を育成する」という小学校英語科の目標のもと、浦添市は英語教育特別区域の指定を受けた。それにともない浦添市内の全ての小学校に「英語科」が設置され、小学校での英語の学習が進められている。平成17年仲西小学校6年生の調査によると、英語が楽しいと答えた児童が88%であるのに対し、平成18年仲西中学校2年生のアンケートによると、英語が好き(楽しい)と回答した生徒は17.3%に減少し中学校に入学してしばらくすると、英語嫌いが増えてくる。

その原因をいくつか考察してみると、「中学校では英語学習に文字がある」、「理解度や英語の能力を測るためのテストがある」、それに伴う「評価」があり、さらに、「高校入試を意識した学習をしなければいけない状況がある」などが考えられる。このように、小学校では英語が嫌いにならないよう授業を工夫し、数値的な評価をだしていないのに対し、中学校では学習した結果が数値的な評定で出されている。といった学習形態の変化によるものではないかと思われる。

そこで、中学生に何のために英語を勉強しているのか意識調査を行った。その結果、約6割の生徒がテストで良い点を取るためと回答している。(平成

18年仲西中学校2年生203名)。また、19%の生徒が英語が嫌いであると答え、63.7%の生徒が、英語は好きでもなく嫌いでもない普通であると回答した。

アンケートの数値でみると、「英語が好きである」、「英語は普通である」、の両方合わせると81%おり、授業の工夫や活動の仕方で英語が好きになる可能性があると受け取れる。

そういった背景を踏まえ、中学生が英語を勉強している目的をアンケートから読み取ると、テストというキーワードが出てくる。

実際、授業の中で「ここはテストに出る重要構文だよ」とか「次の授業で単語の豆テストを行いますので覚えましょう」などと呼びかけると、生徒の集中力が増すのである。

そこに着目し、テストを英語学習の基礎基本の定着に利用しようと試みるわけである。

単語テストを継続的に行うことにより、語彙を増やし、小テストで文法テストを行い、語順や構文を理解し、リスニングテストで、聞く力を養う、単元テストでは教科書の内容を把握し、インタビューテストでは、音声によるコミュニケーション能力を発揮させる。そして、総合的な英語能力を定期テストで完成させるという構想である。

以上が本テーマを設定した理由である。

II 目指す生徒像

英語を意欲的に学習し、基礎学力を身に付けた生徒。

III 研究の目標

◎英語の基礎学力が身に付くようなテストの活用方法を確立する。

◎英語を意欲的に学習し、基礎学力が身に付いている生徒を育成する。

IV 研究の仮説

1 基本仮説

「テスト」を計画的、継続的に行うことにより生徒の学習に対するモチベーションが高まり英語の基礎学力が身に付くであろう。

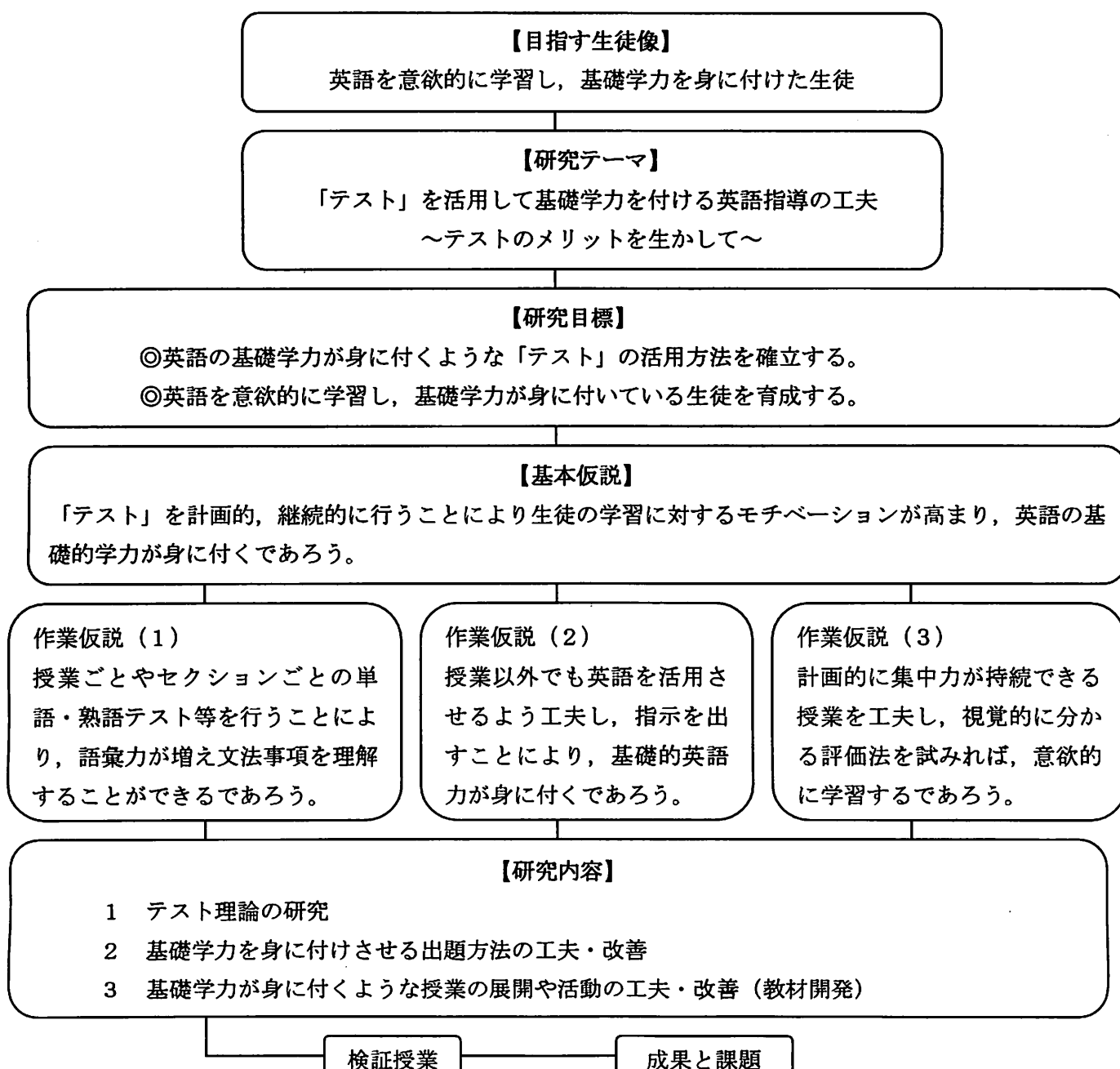
2 作業仮説

(1) 授業ごとやセッションごとの単語・熟語テスト等を行うことにより、語彙力が増え文法事項を理解することができるであろう。

(2) 授業以外でも英語を活用させるよう工夫し、指示を出すことにより、基礎的英語力が身に付くであろう。

(3) 計画的に集中力が持続できる授業を工夫し、視覚的に分かる評価法を試みれば、意欲的に学習するであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 テストについての理論研究

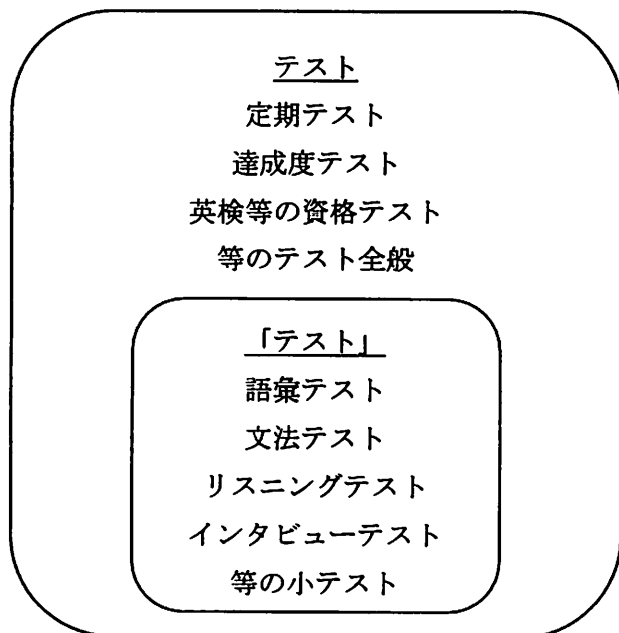
(1) 本研究におけるテストの意義

最初に、本研究におけるテストの定義付けをしておきたい。本研究に登場するテストは世間一般の能力や達成度を測ったり、評価を目的としたりするテストだけをいうものではなく、意欲的に学習する態度と基礎学力を身に付けた生徒の育成を目指したものである。よって、「テストは目標達成のための手段であって目的ではない」と定義付けをして本研究を進めていきたい。

(2) テストのグルーピング

目的に応じて世の中には多種多様なテストが存在している。本研究では上記の定義により、より頻繁に活用する小テストを「テスト」と表記し、小テストを含めた定期テスト、達成度テストや検定試験のようなテスト全般を単にテストと表記するものとする。

〈テストのグルーピング図 I〉

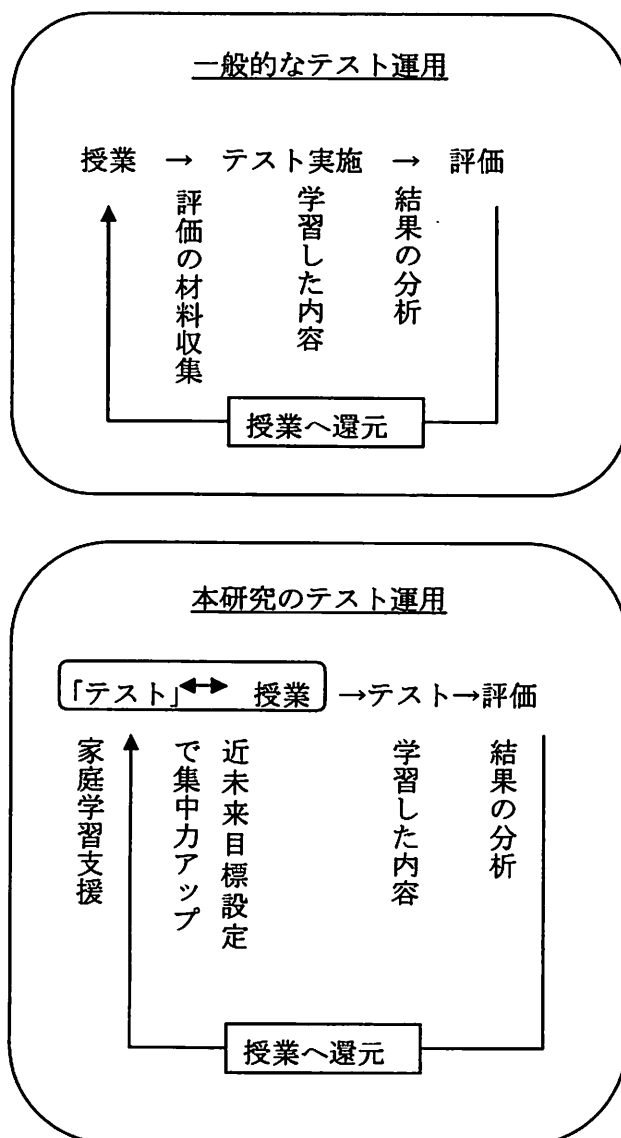


(3) 研究テーマとの関わり

一般に認識されているテスト運用と本研究で活用しようとしている「テスト」について、主題と副題の文言の意味をここで提示しておきたい。テストの活用は通常、授業を通し、その成果の総大成として実施する。いわゆる「学習者

の理解の程度を測る」「学習者の能力を測る」あるいは「指導者の教え方の評価をする」などを把握するために活用されている。これらは(2)の表記法によるとテストである。これらのテストのメリットは(6)に示されている通り「生徒の学習意識を高める」ものである。そういう意味を込めて副題に「～テストのメリットを生かして～」とした。次に主題の文言について述べると、本研究では主に小テストすなわち(2)の表記法でみると「テスト」を活用して生徒の意欲・関心と基礎学力を付けることを目的としている。よって主題のテストを「テスト」にした。

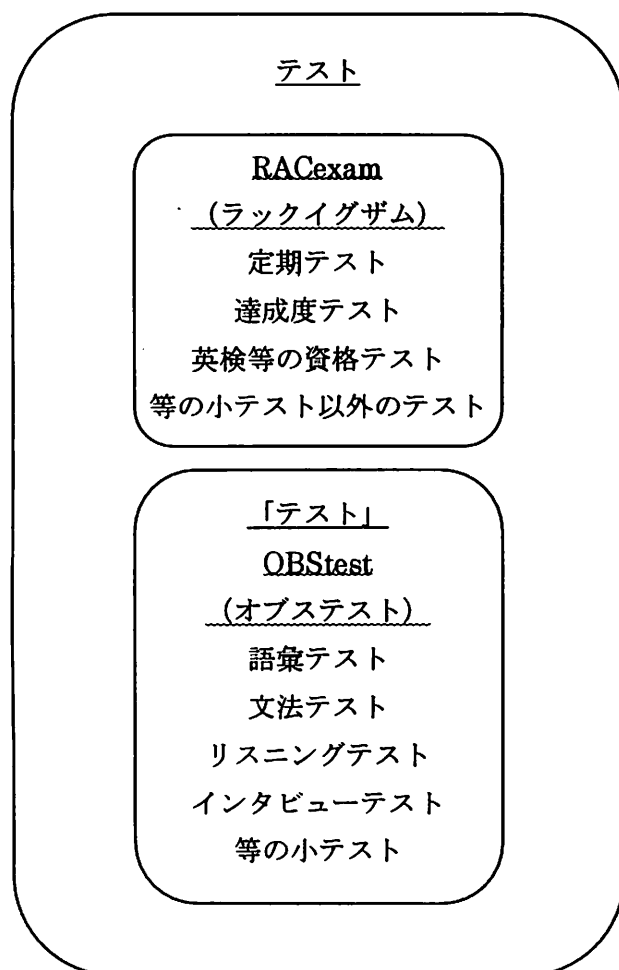
〈テストの運用構図〉



(4) テストのネーミング

(2) では表記に関して提示した。具体的にイメージができるようにここでは便宜的な呼び方を提示したい。本研究では主に小テストを活用し、検証を試みるが、この小テスト、すなわち「テスト」を OBStest (オブステスト) と名付ける。これは、頻繁に(Often)行う基礎的な(Basic)小テスト(Short test)の頭文字を取って命名したものである。さらに、小テスト以外のテストを RACexam (ラックイグザム) と呼ぶことにする。これは、定期テスト(Regularly test), 達成度テスト(Achievement test), 資格試験(Certificate examination)の頭文字を取ったネーミングである。

〈テストのグルーピング図Ⅱ〉



(5) テストの目的とは何か

テストは何の目的で実施するのか。多くの生徒にとって、テストの目標は「良い点を取

るため」であると言っても過言ではない。そのことは、1学期にとったアンケートの結果をみると明かである(Iテーマ設定の理由参照)。しかし、指導者側から見るとテストはいろいろな情報を提示してくれる貴重な資料源である。例えば「学習者の学力や能力を知ることができる」「学習者がどの程度まで理解しているのか知ることができる」「教える側の教授活動の評価をすることができる」などである。

本研究におけるテストの目的は(1)に示した通りである。

(6) テストのメリットとは何か

テストの存在に疑問をもっている生徒は少ないであろう。いたとしても、テストをしても良い点が取れないという理由であるのが多いと思う。すなわち、問題が解けないからいやだということである。しかし、一定の評価や生徒自身の目標到達レベルを把握するためにもテストは必要であるということを行うと多くの生徒は納得する。

生徒にとって、テストとは「評価」や「目標達成レベルの把握」そして「良い点をとるため」であるとするなら、学習の動機は身近に控えたテストである。たしかにテストだけを目標にした指導を教師側が意識すると人間味も面白味もない暗記中心の機械的な授業で進行する恐れがある。逆にテストの存在を無視し、ただ楽しいだけの授業を追求しても後に残る英語力は微量であろう。仲西中学校2年生の6割以上がテストの存在を動機付けの大部分に上げている以上(Iテーマ設定の理由参照)、それをうまく活用しない手はない。注意しないといけないのは、研究実践を間違えるとテストの素点を上げるだけの点取り屋の育成になる可能性がある。現実味のあるテストという何かしら不思議な緊張感や集中力を誘発するこの響きを利用して、意欲的に学習し、基礎学力を身に付けた生徒を育成しようと試みる。

テストのメリットとは、すなわち、「生徒の学習意識や動機を高め、集中力を増す」というこ

とであろう。

- (7) 何を持って意欲的に学習し、基礎学力が身に付いていると判断するか

意欲的に学習しているかどうかを評価するのは生徒の内面を見るわけなので難しいところもあるかもしれないが、ここではポイントカード法と自己評価表などを参考に目に見える形で現れた箇所を評価しようと試みる。ポイントカード法の具体的な方法としては、発表や発言、意欲的に参加した場合に、ポイントとなるカードを配布するのである。授業終了後名前を書かせ回収する。スタンプに比べ、ポイントを与える時間を短縮することができ、後で誰がポイントを得たか把握できるという利点がある。そのポイント数で意欲的という項目の評価を試みたい。

次に、基礎学力の評価だが、テストの出題法を工夫することにより、合格基準を決め、それに合格すると基礎学力が付いていると判断したい。基礎学力が付いたと判断する合格基準はOBStestの8割以上と具体的に設定する。

2 基礎学力を身に付けさせる出題方法の工夫・改善（作業仮説①）

- (1) 基礎学力とは何か

学習指導要領によると「初歩的な英語を使って聞くことや話すこと、読むこと、書くことができる」とある。すなわち、中学校3カ年間で学習した文法事項や英語表現を用い、自分の意志を伝えたり、相手の言っていることをある程度理解できたりするということである。

本研究の基礎学力も学習指導要領に準じたものとする。

- (2) 英語力の達成目標をどこまでに設定するか

中学3カ年間の英語の達成目標は学習指導要領の基礎学力の定着でみることができ、生徒の実態や教える側のポリシーによって具体的な表現は多少違うであろう。

例えば、港川中学校のM.S.教諭は中学3カ年間の英語の最終目標を「日常会話ができる程度」とし、同じく港川中学校のY.D.教諭は「英語を

積極的に活用する態度の育成」としている。また、浦添中学校のM.T.教諭は「英語が話されている知らない世界に放たれても、目的地に無事到着できる」としている。各先生方は素晴らしいビジョンをもって日々、中味の濃い授業を展開している。

ここで私の中学校3カ年間の英語最終目標の設定を試みた。学習指導要領と上記3名の先生方の目標を参考にしてこのような表現にした。

「今までに学習してきた英語表現を駆使し、自分の考えを相手に伝えたり、相手の言っていることがある程度理解できたりできるように育成する。また、英語力のさらなるスキルアップをねらうとき、既習の英語力が土台になり、学習意欲を維持させ挑戦することができる。」とした。文言は少し長いですが、中学校を旅立ってみんながみんな英語のシャワーを浴びる世界にどっぷりとつかうわけではない。しかし、英語は世界の共通語として身の回りにあふれている。英語に接する機会はあるのである。それらに興味を示し、外国人と積極的にふれあい、間違っても良いから積極的にコミュニケーションをとることができるような生徒を育てたい。そして、英語のスキルアップを必要とする場が生じたとき、例えば海外旅行や外資系企業の就職など、英語学習に抵抗なく入っていけるように基礎学力を身に付けさせたい。そういった願いをこめて私の中学校3カ年間の英語学習最終目標を設定した。

- (3) 出題方法はどのような形式が良いか

「無責任なテストが落ちこぼれを作る」（若林・根岸著、大修館書店）「英語テスト作成の達人マニュアル」（静著、大修館書店）の両書籍によると、テスト問題の出題形式はなるべく英語を生成できる形で出題した方が良いとある。そして、テストポイントがはっきりしていることが重要とある。英文を日本語に訳する行為は解答に日本語を生成させているので出題形式としてはあまりふさわしくないと述べられている。実際浦添中学校で実施された「英語基本

文テスト」は英語の生成を求めているテストであった。これらを参考に小テストの出題形式を「なるべく英語で解答を求める問題」「どんな項目をテストするのか明確な問題」などを考慮して作成することにした。また、単語は単独で出題するのではなく、教科書本文とリンクさせて出題することにした。そうすることにより問題を解きながら教科書内容理解を導くのではないかと考えたからである。

(4) 小テストの運用方法

計画的に継続的に行うのが好ましい。また、近未来目標設定で比較的短いスパンで努力成果が確認できるようにするため、定期テストを1つのスパンの区切りとするのが良いと考える。1つの小テストは解答、評価、回収も含め長くても15分以内がベストである。あまり長いと小テストで授業の大部分を占め授業のリズムを損なう恐れがあるからである。これは多くの英語関係の書籍や現場で実践している多くの先生方の意見でもある。よって、解答も短時間で採点できるよう工夫しなければいけない。解答は隣の席の生徒同士で交換して採点するという方法を採用した。人のテストを採点することにより丁寧に採点するのではないかと考えたからである。

本研究での運用方法は、テスト範囲の予告をして、授業のはじめに小テストを実施する。さらに同じテストを定期テストまでに数回実施するというやり方で実施したいと思う。このやり方で行うと、授業以外での学習を促進する効果があり、何を勉強していいのかわからない生徒に学習支援をすることができるという利点がある。また、解答が終了した時点で努力評価表にできなかった問題を記入することで、どの問題ができていないか把握することができ、次の学習の手助けになるよう工夫した。

3 基礎学力が身に付くような授業の展開や活動の工夫・改善（作業仮説③）

(1) 英語の授業は英語ですべきか

結論から言うと英語の授業は英語で行うべきである。これには賛否両論あると思うが、私は当初、英語の授業は日本語でも良い派であった。なぜなら、英語は授業以外に使う機会がなく、英語を聞くこと自体理解していないのに英語で授業を進行すると余計に意味が分からなくなるのではないかと懸念したからである。しかし、書籍や講演会、同僚の先生方の意見や授業参観などを通して見聞を広げていくと、日本語を多く使った英語の授業は、教える側が生徒に対する能力を限定しているものだと気づかされた。

その理由を以下に述べると、英語の授業以外子どもたちが英語を話す機会が少ないからこそ、英語の授業では多く英語に触れさせようという発想。子どもたちは意外と英語を理解しようとしているということ（させればできる）。クラスルームイングリッシュに慣れさせ、簡単な英語を使いある程度の指示はジェスチャーを使えば子どもたちに伝わるということなどがわかったからである。もちろん、すべて無理に英語を使用して行えばよいということではない。日本語の使用を最小限にし、生徒に英語を理解させる努力をするということである。

(2) より良い授業デザインとは

生徒を授業に集中させる、参加させる方法として50分の授業をいくつかのパーツに分けて、テンポよくメリハリをつけて行うと良いということ。「中学英語の授業開き」(田上編著, 明治図書)に紹介されている。通り一辺倒の活動ではなく、変化を付けた活動を取り入れることにより授業を活性化させるというものである。これを参考に本研究の参考授業Ⅰでは仲西中学校の桑江直子教諭の手作り教材(ビンゴシート)を使った授業を参観させていただいた。参考授業Ⅱでは港川中学校の大門由加里教諭の授業を参観させていただいた。以下2人の先生方の授業デザインをパーツごとに分けてみたいと思う。

〈 参考授業Ⅰ 〉

指導者：仲西中学校 桑江直子

学 年：2年1組・2組（少人数26名）

パーツ1，単語の一斉練習（復習単語）

（FC使用，裏表使用）

パーツ2，列ごとの単語練習（縦横方式）

（FCを見せて発音）

パーツ3，ビンゴシート配布，単語を書か

せる（正確に丁寧に書くよう指示）

パーツ4，ビンゴゲーム実施

（聞き取り能力）

パーツ5，復習ワークシート

（英語での解答を要求）

パーツ6，既習文法のモデルセンテンス3文を

5回視写させる（書く力）

備 考：英語使用度70%，スタンプラリーを
活用している。

〈 参考授業Ⅱ 〉

指導者：港川中学校 大門由加里

学 年：2年6組（少人数20名発展コース）

パーツ1，簡単な英語での挨拶

（表現力，聞く力）

パーツ2，QAゲーム（表現力，聞く力）

パーツ3，既習文法の復習（理解力）

パーツ4，既習文法を使ったドンジャンケンゲ
ーム（表現力）

パーツ5，既習文法の書き取り（書く力）

備 考：英語使用度90%，スタンプラリーを
活用している。

どちらの授業もパターンに変化を与え，生徒の授業への参加を導いている。私のいくつかの検証授業もこのようにいくつかのパーツに分けて，子どもたちが飽きることなく身に付けさせる力を付けさせる授業デザインを工夫しようと試みる。

（3）動機付けの工夫

生徒の動機付けの場面で現場の先生方が一番多く採用しているのがポイントを与えるということであろう。その中でもスタンプを活用して目に見える形で意欲的に学習できるように各自

工夫している。浦添中学校や仲西中学校では副教材に付いている世界一周スタンプラリーで子どもたちに活気を与えている。私の検証授業では仲西中学校の照屋道代教諭も活用しているスタンプの代わりにカードを使った形式でポイントを与える工夫をしてみた。ポイントを与える生徒にカードを渡し，授業終了後そのカードに名前を記入して提出してもらうのである。そうすることにより，スタンプを押す時間を省くことができ，誰がポイントを得たか授業後すぐに把握できる。その他に，OBStestでの自己評価表で自己の努力度が確認できる工夫もしてみた。継続的に行われるテスト結果の間違った問題を記入させることで，どの部分でつまづいているか分かるように工夫した。

4 授業以外で英語を使わせる工夫（作業仮説②）

（1）家庭学習支援

OBStestの運用方法の工夫により，家庭学習の手助けができるようにした。テスト範囲の予告である。次回の授業で行うテスト範囲を予告することで，家庭学習のやり方が分からない子への支援になると考えた。

（2）英語無料サイトの利用

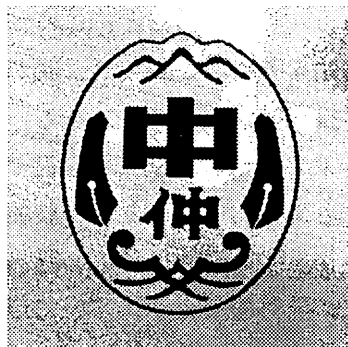
現在多くのWeb上に無料でできる英語学習サイトを見つけることができる。それを上手く活用して生徒の英語学習に取り入れられないか計画を試みた。パソコンを通し，視覚的にわかりやすくゲーム感覚で学習することができるので，学習効果がでるのではないかと考えたからである。しかし，現在県下を誇る生徒数をもつ仲西中では，技術科との兼ね合いで全ての英語のクラスで平等にコンピュータ室を利用するのはかなりの期間で難しいことがわかった。年間を見通した計画が必要である。本研究では英語クラブを活用して，放課後のコンピュータ利用を活用して学習効果の推移を測定しようと計画している。

Ⅶ 授業実践

1 実践の記録

本研究のメインである OBStest は桑江直子先生の協力で各授業で実践させていただいた。私が検証授業を行ったのは5回である。その中の公開検証授業を含む Unit7 での授業計画を載せたいと思う。5回の検証授業で授業改革を行ったのが、視覚的教材を使い学習内容がイメージしやすいようにした、教師側による英語での授業を心がけた、座席配列を工夫することにより、学習雰囲気向上に努めた、等を実践した。

第2学年英語科学習指導案 ENGLISH TEACHING PLAN



日時：2007年1月12日（金）2校時

Date : Friday, January 12, 2007 2nd period

場所：浦添市立仲西中学校

Place : Nakanishi Junior High School

学級：2年5・6組（男13名、女12名、計25名）

Class : 2nd grade class 5 & 6 (25students)

授業者：上間幹夫、イボンヌ・ランバート

Instructors : Mikio Uema, Yvonne・Rambert

I 単元名：Unit and Text Book

Unit 7, My Favorite Movie (NEW HORIZON English Course Book 2 東京書籍)

II 単元の目標：The Aim of This Unit

①比較表現（-er, the -est, more, the most, better, best, as... as）の形・意味・用法を理解し、それを用いて簡単な対話ができる。

Understanding the comparative expression form, meaning, use and the students can dialog with friends by using that.

②映画「E.T.」について本文を理解し、要点を述べることができる。

Understanding story of the textbook, so that students can use it as an example to talk about.

③写真を使って2、3文程度のショートスピーチができるようにトレーニングする。

The students can say with a couple sentences in English when they see the pictures.

III 単元について：About the Unit

(1) 教材観

映画を話題にする。生徒にとって映画とは関心が高く、話題として引き付けやすい。また、比較表現を学習するのに適している。「E.T.」は古典的な名作だが、物語の大枠が明快で、理解しやすく練習しやすいことから取り上げた。また、生徒の授業に対するとびつきが増すよう、使用する写真は生徒の身近にいる先生方の乗り物を写したものを使い工夫した。

Viewpoint of the Material

Using a famous movie as a teaching material will attract the students' attention and motivate them. A movie is also suitable for learning the comparative expression because of its visual nature. "E. T." is clear and easy to understand, especially if we just concentrate on one section of the story. And I will make it more interesting for the students by using examples they know. For example, I will use pictures of the teacher's bike for the comparative degree.

(2) 生徒観

2 学年の英語は少人数編成で授業が行われている。5 組と 6 組をあわせて 3 つのクラスに分けた 1 クラスである。編成方法は均質で分けてあり、学力的に高い生徒もいれば低い生徒もいる。発言はそんなに多くはなく活動をすると静かな雰囲気で行われる。しかし、ワークシートの記入など机上面での学習は落ち着いた雰囲気で行われる。そのためか、2 学期中間英語テストでは学年平均 57.9 点に対しこのクラスは 62.1 点と一番高い。

The Students in this class

This class is a mixture of class 5+6, combined divided into three. There is a mixture of both high-level ability+low level ability students. They are a quiet but hardworking group and they work hard to fill in the worksheet. This class has the highest average score in the 2nd grade.

(3) 指導観

始業のベルのあとすぐに OBStest を配布して集中力を高める。一連の作業の後、挨拶やウォーミングアップに移る。そこでは比較できるような写真を見せて、比較表現を発言させるよう導く。写真を使うのは視覚的な学習がイメージや集中力増進に一役買っていると確信するからである。本時の題材が映画なので、映画音楽を用いて臨場感を出す工夫も試みた。席の配列も通常配列から照道配列にし、生徒同士の顔が確認できるよう工夫した。ALT との協力のもと、授業進行はなるべく英語を使用した展開を試みる。この授業では主に作業仮説③を検証しようと思う。

Outline of the Lesson

Teachers distribute the OBS test to the students soon after the opening bell in order to raise their concentration straight away. After that, we do a greeting and a warm up. We make the students say the comparative expression by using photographs so they can understand English by visually effective learning. Because this class is about the story of "E.T.", we would also like to use the music of "E.T.". The seating arrangement was a replica of Ms. Teruya's class, so that we can see all students' faces. I will try to use English as much as possible during the class, in cooperation with ALT. I try to verify hypothesis 3 in this class.

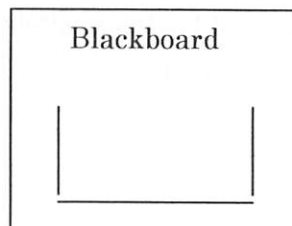
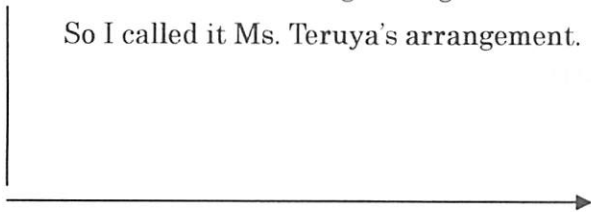
(補足) 照道配列：照屋道代先生が採用している机の配列。コの字型配列のこと。

この方法は他の先生方も行っているが、私が最初にこの座席で行った英語の授業を見たのが彼女の授業であったので個人的に照道配列と呼んでいる。

(Note) Ms. Teruya's seating arrangement.

I first saw this seating arrangement in Ms. Teruya's English class.

So I called it Ms. Teruya's arrangement.



IV 評価の観点：Viewpoint of the Evaluation

観点 1 (Viewpoint 1)：コミュニケーションへの関心・意欲・態度

A concern, will, attitude towards communication

観点 2 (Viewpoint 2) : 表現の能力

Ability in expression

観点 3 (Viewpoint 3) : 理解の能力

Ability in understanding

観点 4 (Viewpoint 4) : 言語や文化に対する知識・理解

Knowledge and understanding of the language and the culture

V 指導計画 : Lesson Plan of the Unit 7

Lesson	My Favorite Movie	達成目標 Target
第1時 First	Starting Out p.76	比較表現(-er, the-est)の形・意味・用法を理解し、表現できる。 Understanding the comparative degree. (-er, the-est)
第2時 Second	Dialog p.77	比較表現(more, the most)の形・意味・用法を理解し、それを用いて簡単な対話ができる。 Understanding the superlative degree. (more, the most)
第3時 Third 本時	Reading for Communication 1 pp.78-79 DEMONSTRATION CLASS	better, best を用いた文の形・意味・用法を理解し、表現できる。 Understanding better and best 本文の内容を理解する。 Understanding the contents of the textbook.
第4時 Fourth	Reading for Communication 2 pp.78-80	as...as～を用いた文の形・意味・用法を理解し、表現できる。 Understanding as...as -. 本文の内容を理解する。 Understanding the contents of the textbook.
第5時 Fifth	Review 1 pp.76-80	比較級, 最上級, as...as について復習し, 理解を深める。 Review of the Unit 7 Activity
第6時 Sixth	Review 2 pp.76-81	Listening Plus 7

VI 本時の展開 : Lesson Plan of the Demonstration Class

(1) 本時の目標 : Target of This Lesson

① better, best を用いた文の形・意味・用法を理解し、表現できる。

Understanding better and best

② 本文の内容を理解する。

Understanding the contents of the textbook.

(2) 授業仮説

OBStest により、家庭での学習が支援され、授業に反映されると思われる。また、視覚的教材を使う

ことにより、文法事項をイメージとしてとらえ表現することができると思う。身近な人たちを登場させることにより新しい比較表現の日本語説明を極力最小限にして理解させることが可能ではないかと仮説を立てた。

The Class Hypothesis

The OBS test will gear the students towards focusing in the class. It encourages them to do homework. (They will have to prepare for the test at home). And they'll get motivated for the class. It is easy for the students to understand English when we use visual aids. The students can quickly understand the comparative expression when we use familiar topics that they know. It minimizes the JTE's need to explain in Japanese. The students can easily understand without Japanese.

(3) 準備する物 : Things to Prepare

OBS test, 写真(Pictures), ワークシート(Work sheet), プロジェクター(Projector)
 フラッシュカード(Flash cards), ピクチャーカード(Picture cards),
 ポイントカード(Point cards), 自己評価表(Self evaluation sheet)
 CDセット(CD and stereo), 地球儀(Globe), ボール(ball)



(4) 本時の展開 : Procedure of This Lesson

(45 minutes class)

時間 Time	学習活動・生徒の動き Students	教師の動き・留意点 Teachers	評価 Eva	検証・その他 Remarks
OBS test 8分 8min	<ul style="list-style-type: none"> 問題を解き隣の生徒と交代して解答する。最後に努力評価シートに記入して提出。 * The students do the OBS test and change answer sheets with each other to mark the answers. They then hand in their evaluation sheets and answer sheets. 	<ul style="list-style-type: none"> 始業のベル後速攻で OBS test を配布, 生徒の集中力を高める。(BGM) * We hand out OBS test to the students soon after the opening bell in order to gain their immediate concentration. (BGM) 努力評価表と解答を回収する。 * Collect the evaluation sheets and the answer sheets. 	観点 3 VP 3	パーツ 1 Parts 1 (Writing) 作業仮説① Hypothesis 1 仮説作業② Hypothesis 2
Greeting and Warm up 7分 7min	<ul style="list-style-type: none"> 英語での挨拶 (P) Greeting 写真を見て発表 (P) Show & Tell Look at pictures (復習を兼ねる) 	<ul style="list-style-type: none"> 英語で挨拶 (P) Greeting, date, day, weather What did you do...? Show & Tell Using pictures Review of the last lesson 	観点 1 VP 1 観点 2 VP 2	パーツ 2 Parts 2 (Listening & Speaking) 仮説作業③ Hypothesis 3
	<ul style="list-style-type: none"> good, better, best の学習 Learning good, better, best 	<ul style="list-style-type: none"> Hand out good, better, best の学習 Teaching good, better, best 	観点 4 VP 4	パーツ 3 Parts 3

2 OBStest の出題方法について

単元で学習している英単語を答えて欲しいのに、日本語に対応する英単語がいくつかある場合、他の英単語を答えてしまう生徒がいる。もちろん、答えが当たっているなら正解にするのは当然である。しかし、求めている単語が分からないかもしれない懸念が残る。それをなくすため、求めている英単語の頭文字だけを解答欄に記入しておいて、その頭文字から始まる英単語を答えさせる、というシステムにすればこの問題は解決できると考え下のような出題方法をとった。実際生徒たちにはヒントにもなり解答の手助けになった。また、何点満点ではなく、1問1点にし、満点が問題数と等しくなるよう工夫した。問題の配点に重みを付けないことにより、単純にこの問題数に対しどれだけ解けたかが分かるようにしたためである。

2学期2学年期末テスト範囲の単語・文法小テスト Unit 7 編 I Part 1

2年__組__番 氏名_____ (Textbook pp.76-77)

【単語力(書く力)を見る問題】

(1) 次の日本語訳を参考に、英文の() 内に書かれている文字で始まる単語を記入して下さい。
(各1点)

① My favorite (m _____) is Godzilla.

私の一番好きな映画はゴジラです。

② I'm (s _____).

私は強い。

③ I'm stronger (t _____) you.

私はあなたより強い。

④ King Kong is a (m _____).

キングコングは怪物です。

⑤ This is my favorite science (f _____).

これはわたしの一番好きな科学小説です。

⑥ E.T. is a (m _____) movie.

E Tは感動的な映画です。

【文法などの理解力を見る問題】

(2) 教科書76ページと77ページの目標フレーズの問題です。日本語を参考に() 内に書かれている文字で始まる英語を記入して下さい。(完全解答) (各1点)

⑦ (W _____) is (s _____), Godzilla (o_) King Kong?

ゴジラとキングコングはどちらが強いですか。

⑧ I think Godzilla is (s _____) (t _____) King Kong.

私はゴジラがキングコングより強いと思います。

⑨ Godzilla is (t _____) (s _____) of all monsters.

ゴジラは全ての怪物の中で最も(一番)強いです。

⑩ What (k _____) (o_) movies do you like?

どのような映画が好きですか。

⑪ This movie is (m _____) interesting (t _____) that one.

この映画はあの映画よりも面白い。

⑫ This movie is (t _____) (m _____) interesting this year.

この映画は今年一番面白い。

/ 12

VII 研究の考察

1 作業仮説(1)の検証

授業ごとやセッションごとの単語・熟語テスト等を行うことにより、語彙が増え文法事項を理解することができるであろう。

(1) 手だて

通常の授業自体に支障がないよう各授業でのOBStestは10分程度の時間で解答、採点、自己評価ができるようにする。採点は隣の生徒同士の解答用紙を交換させて採点する。採点後は自己評価として努力成果表に記入する。回を重ねるごとに自分の成果がわかるようにした。また、テストの出題方法もヒントとなるよう最初の文字を示すことにした。そうすることにより同じ意味を持つ複数の単語が存在するとき解答者が出題者の求めている単語と一致する利点もあげられる。

(2) 結果

OBStestを継続的に実施したクラスとそうでないクラスの間テストの平均点を比べてみた。図1によるとOBStestを実施したクラス45名は中間テストの平均点が61.6点であったのに対し実施しなかったクラス95名の平均点は59.1点であった。次に図2では基礎学力が付いたかどうかの基準であるOBStest8割達成者とそうでない生徒の中間テストでの平均点を比べてみた。

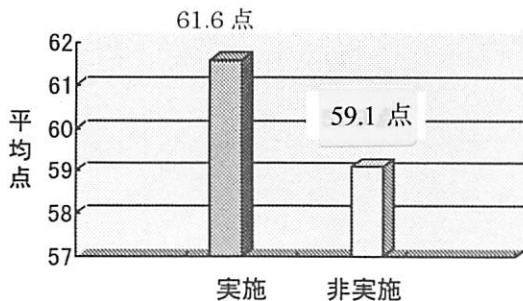


図1 OBStestによる中間テストへの効果

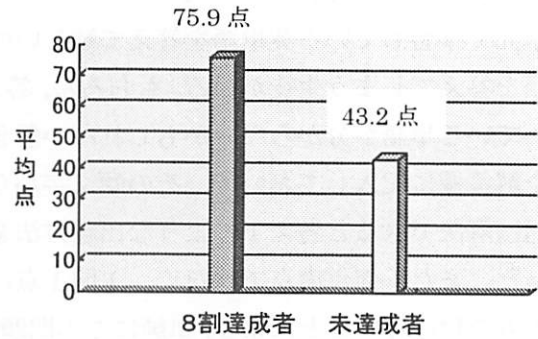


図2 8割達成者と未達成者の比較

図2からも分かるように、OBStestで満点の8割をとった生徒30名は中間テストでの平均点が75.9点であった。それに対し8割に満たなかった生徒15名の平均点は43.2点でありその差は大きい。

(3) 考察

2年3・4組及び5・6組計45名にOBStestを計画的に継続して行った結果、他の実施していないクラス95名に比べ2学期英語中間テストの平均点に差が出た。実施したクラスの平均は61.6点であった。実施していないクラスの平均は59.1点とその差は2.5点である。さらにOBStestを実施したクラスの中でも目標の8割正解に達成した生徒と達成しなかった生徒の中間テスト平均点が前者75.9点に対し後者は43.2点とその差は32.7点もあった。このことから、OBStestを行うことにより中間テストの平均点が上がったと判断して良い。それゆえOBStestの実施により語彙が増え文法事項が理解することができたであろうと考える。

2 作業仮説(2)の検証

授業以外でも英語を活用させるよう工夫し、指示を出すことにより、基礎的英語力が身に付くであろう。

(1) 手だて

OBStestの問題予告により家での勉強法がわ

からない生徒への学習支援を施した。また、教室学習以外での英語学習を試みた。例えばパソコン教室を使い英語学習サイトでの学習、廊下や職員室での挨拶やちょっとした会話を英語で行う等を工夫して実践した。

(2) 結果

① 検証後のアンケート結果より

OBStestの問題予告を行ったクラス45名の生徒に「問題予告は家庭学習に役に立ったか」というアンケートをとってみた。その結果図3のように56%の生徒が役に立ったと回答した。

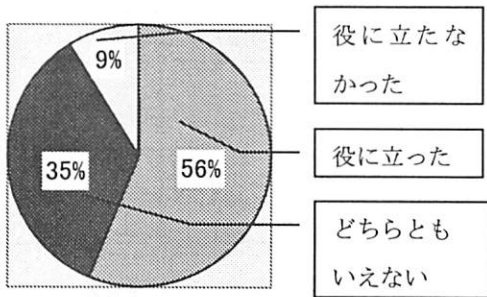


図3 問題予告は家庭学習に役に立ったか

次に「OBStestは単語や文法を学習するのに役に立ったか」どうかを聞いてみた。その結果66.7%の生徒が役に立ったと回答した。図4の通りである。

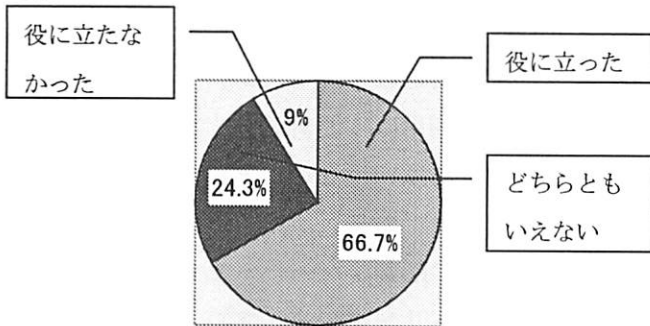


図4 単語や文法の学習に役に立ったか

次に「努力評価表(自己評価表)は解けなかった問題克服に役に立ったか」どうかを聞いてみた。38.3%の生徒が役に立ったと回答した。図5がそれを示している。

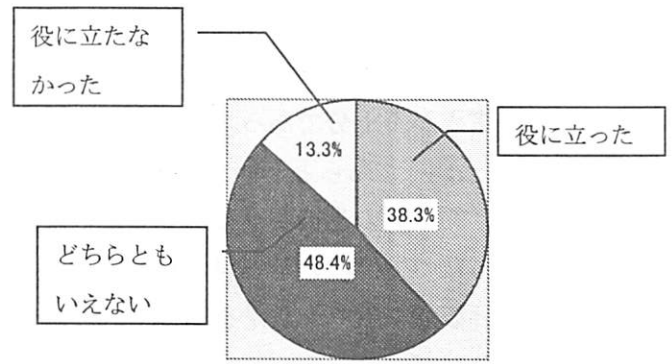


図5 問題克服に役に立ったか

② コンピュータ活用について

最後に英語学習サイトの活用についてである。英語クラブのメンバーに協力してもらい検証した。クラス単位での活動は技術の授業と選択授業との兼ね合いで年間計画的に実行が難しかったためである。利用したサイトは多数存在するが、本研究ではイーオンが無料提供している、英語ぺらぺらサイトを活用した。



図6 コンピュータ学習の様子

英単語のスペリングをゲーム感覚で習得するコーナーで(図6)、10名中8名のメンバーが楽しく単語を覚えることができたと回答している。

(3) 考察

図3に示されたOBStestの問題予告による家庭学習支援では役に立った56%というのは予想より低い数字となった。これは検証したクラス45名に関しては約8割の生徒がもうすでに家庭学習の習慣がついているからではないかと思われる。参考データとして、家庭学習帳提出率最下位のクラスで同じアンケートをとってみると、家庭学習支援で役に立ったと回答した生徒が10%以上増え、68%の数値を示した。対

象を変えるだけでデータの結果に変化が現れるのは大変興味深い。図4の「単語や文法の学習に役立ったか」では、単語や英文の発音や読み方等の指導が不十分であったがゆえに「役に立たなかった」「どちらともいえない」と両方合わせると、約3割の生徒が「役に立った」とは言えなかったのではないと思われる。

努力評価表を見ると段階を追って点数が伸びていく生徒がいる反面(図7)、伸びに悩んでいる生徒もいる(図8)。

第2学年2学期中間テスト範囲の文法テスト努力成果表

2年			
11月20日 月曜日	11月24日 金曜日	11月28日 火曜日	12月1日 金曜日
第1回目 得点 2/15	第2回目 得点 13/15	第3回目 得点 15/15	第4回目 得点
① have to study ② do not have to study ③ will / will go / will ④ must not / must help ⑤ must not eat ⑥ If you can come to the party please call me. ⑦ I think that you need friends. ⑧ I am against the plan because we need our parks. ⑨ asked for ⑩ when	① asked for ② when	全点は 21/15=3	

第2学年2学期中間テスト範囲の文法テスト努力成果表

21			
11月20日 月曜日	11月24日 金曜日	11月28日 火曜日	12月1日 金曜日
第1回目 得点 8/15	第2回目 得点 13/15	第3回目 得点 15/15	第4回目 得点
③ Tom has to finish his homework today. ④ If you can come to the party, please call me. ⑤ I think that you need friends. ⑥ I am against the plan because we need our parks. ⑦ They asked the city for a new parking area. ⑧ I watched TV when my father came home.	③ I think that you need friends. ④ I watched TV when my father came home.	全点は 21/15=3	

図7 変化があった生徒の努力評価表の例

努力評価表についてアンケートをとると「役に立たなかった」「どちらともいえない」を両方合わせると、61.7%となっている。これは、授業終了後にデータ収集のため努力評価表をいちいち回収していて、生徒自身にこの用紙を参考にして振り返る機会を与えなかったのが原因ではないと思われる。

第2学年2学期期末テスト範囲の小テスト努力成果表 Unit 7編

Part 1		Part 2	
11月9日 水曜日	11月10日 木曜日	11月11日 金曜日	11月12日 土曜日
第1回目 得点 1/12	第2回目 得点 3/12	第1回目 得点 1/11	第2回目 得点
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	

第2学年2学期期末テスト範囲の小テスト努力成果表 Unit 7編

Part 1		Part 2	
11月9日 水曜日	11月10日 木曜日	11月11日 金曜日	11月12日 土曜日
第1回目 得点 5/12	第2回目 得点 6/12	第1回目 得点 2/11	第2回目 得点
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔	

図8 変化に乏しかった生徒の努力評価表の例

インターネットを利用して無料の英語学習サイト活用場面では、英語学習サイトのほとんどがセキュリティブロックにひっかかり開くことができなかつた。活用した英語学習サイトは設定を解除してもらい利用することができた。さらに、コンピュータ室利用では、技術の授業や選択授業が優先的に使用されているため、英語の授業でのクラス単位の利用は年間計画を立て他教科との連携をとらなければいけないことがわかつた。それゆえ、英語クラブのメンバー10名に協力してもらい放課後での活動となった。10名中8名は楽しく単語のスプリングのタイプ打ちができたと回答したが、残りの2名はパソコンのキーボード操作自体が苦手なので、そこからの克服が必要であると感じた。また、スペルリングは楽しく学習できたとしても発音やイントネーションの域にまでくるとタイプ打ちのコーナーでは限界があり、他のサイトの利用も考えなければいけない。

図4の「単語や文法の学習に役立ったか」と家庭学習帳提出率最下位クラスでの問題予告による

家庭学習支援とともに7割弱の生徒が授業以外での英語の学習を行っている。それに伴い、OBStestでの8割達成に反映したと考えられる。このことにより、基礎的英語力が身に付いたのではないかと考える。

3 作業仮説(3)の検証

計画的に集中力が持続できる授業を工夫し、視覚的に分かる評価法を試みれば、意欲的に学習するであろう。

(1) 手だて

ここでの検証は公開検証授業を含んだUnit7の単元で行った。授業構成を最低5つ以上のパーツ(p.11 学習指導案参照)に分けて進めていき、座席配置も生徒同士が発言しやすいように工夫した(p.9 学習指導案参照)。BGMを流したり、写真やプロジェクター等の視覚的教材や機材を活用し実践した。視覚的に分かる評価としては、OBStestの努力評価表(図7)の他、ポイントカード(図13)の提示やワークシートの自己評価記入をさせ理解度を見た。

(2) 結果

座席のコの字型配列について45名の生徒たちの反応を見ると、51.1%の生徒がこの配置に好感を持ち42.2%の生徒が通常配列と変わらないと回答し6.7%の生徒が違和感を持っていることが分かった。(図9参照)

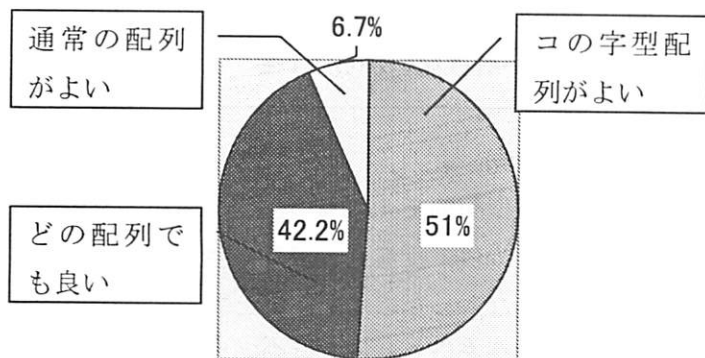


図9 コの字型配列について

表1 コの字型配列に関する生徒の意見 検証クラス45名

コの字型配列で良かった所 23名	
* 普段の席と違うので楽しい	8名
* 周りとの協力して勉強ができる	6名
* 黒板や先生の顔が見やすい	4名
* 先生やみんなの声が聞きやすい	2名
* 授業が分かりやすい	2名
* 後ろの生徒が隣にきて嬉しい	1名

コの字型配列で悪かった所 3名	
* 黒板の字が見えにくい	1名
* 机の移動が大変	1名
* 勉強するのにあまり意味がない	1名

小道具や写真などの視覚的教材(図10)を使って授業を進めると分かりやすいかどうかの問いには、82.3%の生徒が分かりやすい、13.3%の生徒が使っても使わなくても変わらない、そして4.4%の生徒が分かりにくいと回答している。図11である。

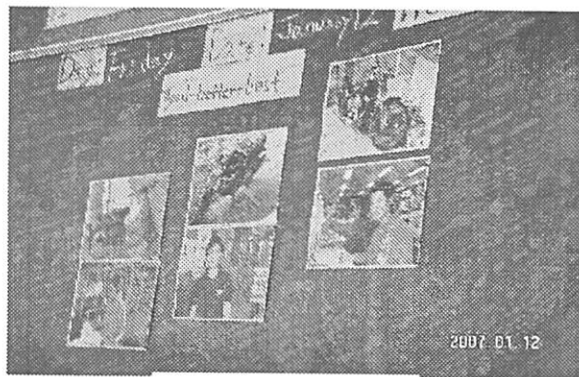


図10 視聴覚教材

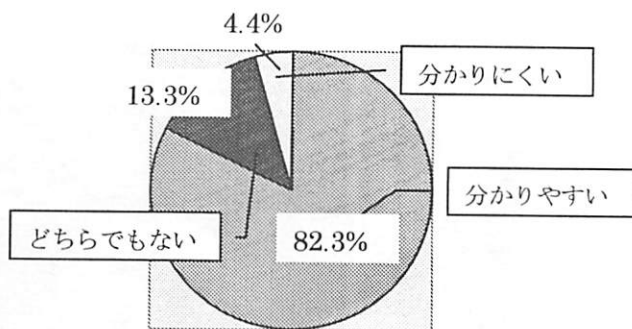


図11 視聴覚教材の分かりやすさ

次に検証授業での学習目的である, better, best の活用と教科書 p.78 の本文理解の程度を調べてみた。図 1 2 がそれを示している。

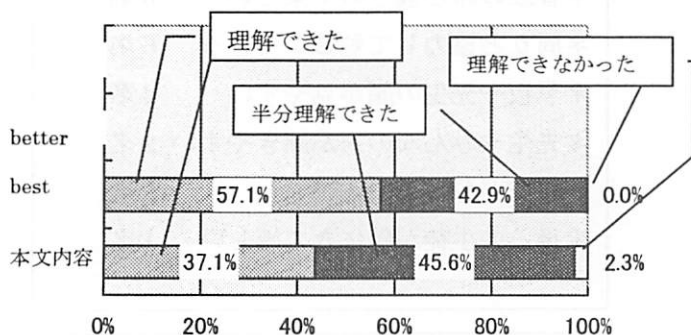


図 1 2 検証授業での学習理解度

better, best の理解度は 57.1%と半分の生徒が理解できている。理解できなかった生徒が 0%である。本文内容は 37.1%の生徒が理解し、45.6%の生徒が半分程度理解できたと回答している。2.3%の生徒が理解できていない。

ポイントカード (図 1 3) の活用も生徒たちの学習意欲を向上させるアイデアとして役に立った。英語が前より好きになった理由 (表 2 参照) でスタンプやポイントカードをもらえるから楽しいと答えた生徒が 6 割弱いることからそのことが分かる。

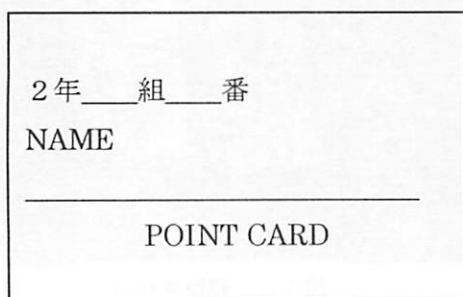


図 1 3 ポイントカード



図 1 4 検証授業の風景

最後に 4 月から 1 月にかけて、生徒たちの英語に対する意識の変化がアンケートを通して見えてきた。このアンケートは 4 月から 1 月にかけて英語が好きか嫌いかという調査ではなく、英語が好きになったか嫌いになったかという英語に対する意識の変化を調べたものである。4 月時点に比べ 1 月時点で英語が好きになった生徒 33.4%, 変わらない生徒 60%, 嫌いになった生徒 6.6%という結果が得られた。

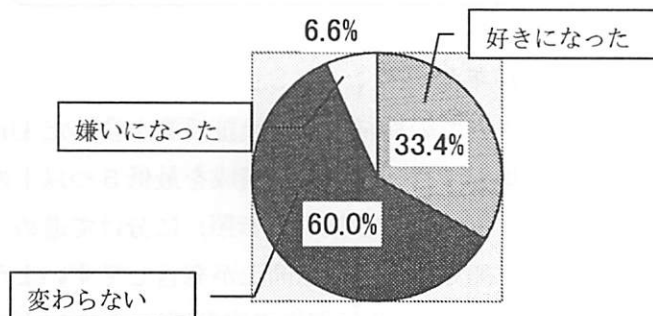


図 1 5 英語に対する意識の変化 2 年生 1 9 8 名

表 2 英語に対する意識変化の理由 検証クラス 45 名

英語が好きになった理由 15 名	
*ポイントやスタンプがもらえて楽しいから	8 名
*英語の意味をだいぶ理解できてきた	5 名
*最近、外国人と話がしたくなったから	1 名
*友達と協力して頑張れたから	1 名

英語が嫌いになった理由 3 名	
*難しくなったから	2 名
*問題が解けないから	1 名

(3) 考察

コの字型配列で 42.2%の生徒が通常と変わらないとしたのは、授業進行がコの字型配列に対応しきれていなかったのが原因だと思われる。宮城妙子氏の言葉を借りれば、コの字型配列は発表や発言をする場合最大の効果を発揮するが、そうでない場合単なる会議のような雰囲気になると述べている。学び合いの雰囲気に持って行けなかったの

が課題に残る。少数ではあるが、6.7%の生徒が通常配列が良いとしている。これは位置によって黒板が見えづらい場所があるからではないかと考える。

視覚的教材や機材を使う場合では82.3%の生徒が分かりやすいと回答しているため、成果はあったと考える。分かりにくいと回答した生徒はコの字型座席で説明したように見えにくい位置が原因ではないかと考える。

次に考慮しなければいけないのが、授業内容の理解度である。better, bestの項目では理解できていない生徒が0%であるにしても、予想以上に結果が伴っていない。その原因をいくつか考えると、授業のテンポや切り替えが速すぎた、そして授業のほとんどが英語での進行であった、生徒に考える機会を与えなかったなどが考えられる。谷内牧子氏は言う、「英語の場合活動比率が少なくとも6が生徒で残りの4が教師でなければいけない」今回の検証授業は欲張ってしまい教師が前に出すぎた節がある。さらに、理解度の伸びを阻害したのがUnit7に関して、生徒の実態を考慮せず、公開検証授業に合わせるためにマニュアル通りのカリキュラムで指導計画を実践してしまったところにあると思う。上原周子氏は既存のモデルカリキュラムを思いっきり解体することも挑戦してみようとアドバイス下さった。授業進行を全て英語で行うことは可能ではあるが、1コマで終わる学習内容を全て英語で行うとなると、3コマまで拡大する必要があるのでないかと実感した。生徒たち自身に自ら考え、気づかせる授業を実践することが必要だからである。指導言語のバランスはもう少し生徒の実態に合わせて日本語での説明も交えて進行した方がよかったのかどうか課題として考えてみたい。

最後に4月から1月にかけての英語に対する生徒の意識の変容を考察してみたい。図14からも分かるように、「英語が好きになった」生徒は33.4%であるのに対し「英語が嫌いになった」生徒は6.6%である。これは、4月の時点で「英語が

嫌い」もしくは「英語は普通」と思っていた生徒の33.4%が1月の時点では「英語が好き」になったという意識の変化を表している。逆に、4月の時点で「英語が好き」もしくは「英語が普通」と思っていた生徒の6.6%が1月時点で「英語は嫌い」ということを示している。英語に対する意識の変化では「英語が好きになった」生徒が「英語が嫌いになった」生徒より比率的に5倍である。これにはいくつかの理由が考えられる。まず、2学年では英語の授業を2クラスプールにしてそこから3つのクラスに編成した少人数制で授業を実践しているということと、2学年の英語の先生方が切磋琢磨して日々の授業を分かりやすく実践しているからではないだろうかと推測する。

視覚的教材の活用で82.3%の生徒が学習理解の手助けになると回答し、コの字型配列では5割強の生徒が学習に意欲を出したと判断できる。また、英語が好きになった生徒で約5割の生徒がスタンプやポイントカードをもらうことに楽しさを感じている。このことから、意欲的に学習したと考えて良い。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) OBStestを実施したクラスの間テスト平均61.6点が実施しなかったクラスの平均59.1点より得点を取ることができ、OBStestの8割達成者はそうでない生徒に比べ中間テストの平均点が32.7点高いことから、生徒たちがOBStestを通し意欲的に学習に取り組み基礎的な学力が定着した。
- (2) OBStestの活用法として予習型より67%の生徒が8割を達成した復習型での実施が効果的であると判断ができた。
- (3) 視覚的教材や機材を使うことにより、学習内容のイメージを膨らませることができ、生徒たちの理解を手助けすることができた。
- (4) 授業の工夫等により4月からの英語に対する生徒たちの好感度が嫌いになった生徒より多い。

2 課題

(1) OBStest での運営の仕方での学習結果に差がでてしまう。本研究報告書の p.15 図 1 にある努力成果報告表では OBStest 実施にあたり単語や文法の練習後授業ごとに実施し誤答を克服している生徒が多い(復習実施型)。公開検証授業で扱った Unit7 では、単語や文法の練習を十分に行わずに実施した(予習実施型)であった。その結果、OBStest での問題克服度は低い。

この課題の解決案として、復習型を軸に OBStest を実施する。

(2) 仲西中英語においては、本年度達成度テストが県平均より下回った。既習した内容についても OBStest で復習できるようテスト運営を工夫する。

(3) OBStest の得点 8 割達成者は実施したクラスの 67%である。残りの 33%の生徒への支援を工夫し 100%の 8 割達成を目指したい。

(4) 学習内容を深めるのと言語活動を取り入れて活動をする場合、両方を一コマの時間に行うのは時間的にかなり困難である。よって、モデル指導を参考に生徒の実態に合わせた独自の指導作成が必要である。

(5) コの字型配列にせよ、通常の配列にせよ、見えにくい位置にいる生徒に配慮した指導を心がけなければいけない。

(6) 他教科との連携を図り、コンピュータ室を効果的に活用する年間計画が必要であると同時に利用するサイトを厳選し、セキュリティーブロック解除の手続きをとる。インターネット利用のマナーについても指導する。

(7) 英語の授業は基本的にオールイングリッシュを念頭に置くが、生徒の実態や理解度を考慮して日本語を使用して効果がある場面は日本語の使用を認める。

【おわりに】

「光陰矢の如し」"Time flies like an arrow." どの国にも似たような諺があると思います。人

類にとって共通の概念なのでしょう。この諺のように過ぎてしまえば短かったと感じてしまうということは充実していたと解釈したいものです。本研究にあつては、「教員矢の如し」"Teachers fly like arrows."でした。教員は子どもたちに関するあらゆる事柄をこなし、その目的(矢)は的確に子どもたちの心(魂)に命中させなければいけません。息つく間もなく、時には公私ともにエネルギーを費やす。そしてあつという間に時が流れて行く。そういったユーモラスの意味合いを込めて「教員矢の如し」としてみました。

研究を始めるにあたり、所長の比嘉信勝氏よりまず「研究」を深めること、次に「今までの自分を振り返ること」ということをおっしゃっていたのが心に残りました。まさに、研究を深めていくと自然に今までの自分の教授法の無計画さや教育に対する熱意が薄れていたように感じます。英語に関する書物、教育書、人生論関係の書籍や授業参観、講演会の参加など、現場にいてはなかなか集中してできないことを、研究所にいる期間率先して行ってきました。仕事に対する考えや熱意はかなり充電しました。琉球大学教授の大城賢氏は飛行機に例えて「小学校の段階では、滑走路をいきよよく走らせて、中学校で大空に飛び立たせる」ということを話されていたのが印象に残っています。飛び立った大空が快晴である環境を高校や大学そして社会等が整えてあげられたらいいなと思いました。

英語教師はどうすれば英語の学力が上がるのか頭の中では分かっているがなかなか実行できていないということを琉球大学助教授の柴田美紀氏から聞いたことがあります。(2005/8 資質向上研修会) 毎日が忙しいということなのでしょうか。実際、忙しいと思います。それを回避するヒントを浦添市立浦添中学校教諭谷内牧子氏からいただきました。春休みや夏休み等のある期間、授業がない時期にまとめて見通しを立てワークシートや授業デザインを計画するというものです。そうすることにより、その場しのぎの授業(今まで私がや

ってきた授業のように)をせず、ゆとりを持って生徒の様子や評価ができるようになるのです。このシステムを早速採用したいと思います。

本研究を始める前、アンケートで英語の学習目的を聞いてみました。複数回答ではありますが「テストで良い点を取るため」が6割を占めました。今回研究終盤になって、英語の学習目的を再度尋ねてみると(1つ選択)、「英語が聞けてしゃべれるようになりたい」が37.8%、「テストや受験で良い点数を取るため」が28.9%、「学校に英語の授業があるから仕方なく」が26.6%、そして「就職や良い人生を送るため」が6.7%と回答が寄せられました。コミュニケーションの手段として英語を勉強してみたい生徒が上位を占めたことは喜ばしい結果ではないでしょうか。子どもたちのその意欲を大切に、私の今後の英語教師としての仕事を全うしていきたいと思えます。

最後に、研究期間中、いつも温かく見守り、時には筋の通った鋭い助言をして下さった、浦添中学校の谷内牧子教諭、浦添市教育委員会の宮城妙子英語コーディネーター、上原周子指導主事、ユーモアも交えながら見守り、納得のいく指導をして下さった、本研究所の比嘉信勝所長、石川博基係長、比嘉清喜指導主事、岸本美知子司書をはじめ本研究所の職員の皆様に心より感謝申し上げます。また、研究の機会を与えて下さいました、「研究のための研究にならないように」(学者ではなく教育者であれ)と助言下さった仲西中学校の知名道博校長をはじめ、研究に協力していただいた2学年の英語科職員、生徒たち、そして、温かい言葉をかけて頂いた仲西中職員の皆さんにも感謝申し上げます。

研究期間を共に過ごし、お互い励まし、いろいろな情報交換をし、充実した有意義な研究をしてきた5名の研究員にも感謝申し上げます。

【主な参考・引用文献】

- | | | | |
|---------------------------|-------------|----------|------|
| ・「無責任なテストが落ちこぼれを作る」 | 若林俊輔, 根岸雅史著 | 大修館書店 | 1993 |
| ・「英語テスト作成の達人マニュアル」 | 静哲人著 | 大修館書店 | 2002 |
| ・「英語教育実践講座第12巻」 | 笠島準一編著 | ニチブン | 1998 |
| ・「中学校英語Q&A実用指導辞典」 | 宮川幸久編著 | 教育出版 | 1986 |
| ・「More English in Class」 | 三省堂編集所編 | 三省堂 | 2003 |
| ・「基礎力を付ける英語の授業」 | 斉藤栄二著 | 三省堂 | 2003 |
| ・「音読指導」 | 土屋澄男著 | 研究社 | 2004 |
| ・「英語のペア学習」 | 大鐘雅勝著 | 明治図書 | 1996 |
| ・「英語授業面白ゲーム集」 | 瀧沢広人著 | 明治図書 | 1993 |
| ・「中学校学習指導要領(外国語編)」 | | 文部科学省 | 1999 |
| ・「週間教育資料11月13日付け」 | 日本教育新聞社編 | 教育公論社 | 2006 |
| ・「ニューホライズン指導書」 | | 東京書籍 | 2006 |
| ・「英語新評価基準表」 | 北尾, 長瀬編著 | 図書文化 | 2002 |
| ・「平成9年度教育論文」 | 岩坂恵子論文 | 八代市教育研究所 | 1998 |
| ・「とんでもない母親と
情けない男の国日本」 | マークス寿子著 | 草思社 | 1999 |